

令和6年度 鳥取県立農業大学校評価システムシート（第2回）

ミッション	次代の農業を担い、指導的役割を果たす人材の育成・確保
重点目標	○学生・研修生の円滑な就農の支援（個別指導の強化及び関係機関との連携による自営就農及び雇用就農の支援強化） ○実践的な生産工程管理を学ぶ（水稻でのGLOBAL G.A.P.の新規認証取得等） ○学生に寄り添った相談・教育支援体制の強化

評価基準（達成度）	
A	100%以上達成
B	80～99%達成
C	60～79%達成
D	40～59%達成
E	39%以下の達成

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策
1	学生・研修生の確保	1 農業大学校の魅力発信	1 過去5年間では、令和3年度入学のみ定員30名を確保したが、それ以外は定員割れとなっている。令和5年度入学の受験者数は令和3年度入学と同程度に回復しており、県外からの入学者も増加したが、令和6年度入学は定員に対して63.3%であった。 ・入学者の出願のきっかけに「HPを見て」の声が多いことから、その充実が必要である。 <入学者数の推移> H31(R元):24名、R2:22名、R3:30名、R4:18名、R5:23名、R6:19名	1 入学者数 定員30名確保	1 ・オープンキャンパス(2回)の開催、学校ホームページの更新による魅力発信 ・農業系高校を中心とした県内高校訪問（全校） ・各高校で実施される進路ガイダンスへの参加 ・高校生の職業観の醸成と農業分野への進路選択の機会提供 ・学校訪問の受入れ（随時）	1 ・オープンキャンパスを2回開催し41名（R5：30名）が参加（うち県内出身者は35名。3年生の参加者は23名で、入学予定者13名）。 ・学生の日々の様子など、学校HPの「農大日記」等でお知らせし、PRを行った。 （農大HPは更新回数 R3：45回→R4：92回→R5：91回→R6：67回（2/21現在）） ・県内農業系高校の上級学校訪問受け入れ（鳥取湖陵高校、倉吉農業高校、地図農林高校の3校、4回）、高校進路指導担当者会や高校で行われる進路ガイダンス等へ積極的に参加（担当者会1回、ガイダンス4回実施。今後、年度末までに2回追加実施）。 <評価指標達成状況> 令和7年度入学試験合格者：20名(R6:19名) ※募集定員(30名)に満たないため、2次募集中	C	1 ・引き続き、情報発信と農業高校との連携を図りながら、入学者の定員が確保できるように、県内高校や在校生の出身高校（県外）の進路担当へ情報提供や説明を行っていく。
		2 農業高校との連携による学生確保	2 農業高校3校（智頭農林、鳥取湖陵、倉吉農業）の農業クラブをオープンキャンパス時に受入れ、3校出身の本校学生との交流会を行っている。 <年次別参加者> H30:12名、R1:6名、R2:12名、R3:9名、R4:5名、R5:3名 スーパー農林水産業士を志向する生徒の食の6次産業化プロデューサー育成講座への受入を行っている。 <年次別受講者数> H30:39名、R1：46名、R2:15名、R3:24名、R4:19名、R5:32名	2 ・農大生と農業クラブ生徒との交流会の開催 ・高大連携の実施 ・高校訪問の実施 ・食プロ育成講座の実施	2 ・オープンキャンパスと農業高校の農業クラブの同時開催による先輩学生との交流 ・倉農等と農高農大一貫プロジェクトの実施 ・スーパー農林水産業士に係る食プロ育成講座受講受入れ ・県内農業系高校訪問による農業大学校の紹介	2 ・農大・農高一貫プロジェクトとして、果樹コースでは倉吉農業高校の圃場でジョイント栽培の剪定指導を2月12日に行い、作物コースでは7月18日に倉吉農業高校で開催されたドローン施肥の実演会に参加してお互いに交流を行った。また、畜産コースでは全国農業クラブの家畜審査競技会（乳牛）に出場する生徒に対して、学生と一緒に家畜審査の勉強を行った。 ・スーパー農林水産業士認定要件である「食の6次産業化育成講座」を開催し、延べ32名（高校3校）の高校生が受講した。（レベル1：22名（高校3校）レベル2：10名（2校） →令和7年度入学では4名の認定者の入学予定。	A	2 ・引き続き、農業高校と連携を図り、入学者の定員が確保できるように努める。
		3 IJUターン就農者の掘り起こし	3 東京、大阪で開催される移住フェア、新農業人フェアに、また、令和5年度に県内で初めて開催された就農相談会に参加し、就農を目指す一般社会人が事前に進路相談できる機会を提供し、相談に応じている。		3 参加可能な東京（4回）・大阪（3回）等で開催される県外就農相談会、県内（倉吉、米子）で開催される就農相談会を通じて就農のための道筋や支援制度の紹介し、就農希望者の掘り起こしを行う。	3 ・参加可能な東京（3回）・大阪（3回）等で開催された就農相談会に対面で参加し、27件の相談を受けた。 また、県内では、「とっとり西部地区まるっと就農相談会」、「とっとり農業人フェア」、「北栄町就農・営農相談会」に参加し、10件の就農相談を受けた。 ・また、就農支援センターが企画した農業視察研修の視察受け入れを行い、参加者と情報交換を行った。	A	3 ・農大は、研修機関の一つとして、就農希望者の確実な就農・定着に向け研修希望段階から関係機関（市町村、普及所等）と情報共有を行い、就農準備や就農まで連携して対応する。

資料1・2

資料3・4

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策
2	着実な就農	1 求人・求職者情報の就農支援関係機関との共有による就農の促進	1 近年、非農家出身学生が約5割を占める中、農業法人等からも求人が増えており、雇用就農による就農が増えている。 ＜年次別就農率＞ R1:65%、R2:76%、R3:67%、 R4:56%、R5:50% (5か年平均 63%)	1 ・学生就農率70%	1 ・就農支援関係機関（ハローワーク等）との情報（求人、求職、研修）共有 ・雇用就農相談会による農業法人等求人者および求職者のマッチング ・県内地元就農を目指す学生就農地農業関係機関との意見交換会の開催	1 ・雇用就農相談会を2回開催し(7月、11月)、求人者のべ50事業者が参加した。相談会がきっかけで2年生5名の雇用就職や研修が内定し、1年生は自身の就農イメージを具体化することができた。また、各産地等で行われる産地体験会等にも積極的に参加を促した。 →日南町農業体験ツアー、倉吉・大栄西瓜産地体験会、倉吉・琴浦梨産地体験会、とっとり農業人フェアに参加した。 ・親元就農予定6名のうち県内就農予定者5名について、卒業後の就農がスムーズに進むよう関係機関との顔合わせや意見交換等を行った 資料5・6 ＜評価指標達成状況＞ 学生就農率 60% // 就農＋農業関係機関就職率 80% (R7.2.27現在)	B	1 ・学生就農率は目標の70%に届かなかったが、農業以外に進む学生は2名のみで、その他は農業関連企業・団体等に就職・進学することから、農業に関わる機会も多く、今後に期待したい。 ＜参考＞ ・農業以外に進む予定の2名は、農業資材等も扱うホームセンターである。
		2 研修生に対する的確な進路指導の実施	2 社会人向け研修制度として運営している各種研修制度の趣旨はそれぞれ異なり、研修生の受講目的も様々である。就農実現に向けては、制度ごとに研修生のめざす目標を踏まえつつ、個々の背景やレベルに即した指導及びアドバイス、研修進捗状況をおさえながらタイムリーに関係機関との調整を実施していくことが極めて重要である。	2 ・研修生就農率：100%	2 各研修において、研修開始時・終了時のみならず、研修期間中の個別面談等を複数回実施しながら、各研修生に適した進路・就農方針に関するアドバイス、必要な関係機関との調整を実施する。	2 就農に向け研修生と個別面談を重ね、支援方針を決定した。就農地の市町村役場、県農林局（普及所、農業振興課）と就農までのスケジュールや経営計画作成支援や共有を図り、連携して就農に向けた支援に取り組んだ。 ＜評価指標達成状況＞ ・アグリチャレンジ科の就農率64%(第26～28期) ・スキルアップ研修修了後就農率100%(2人) 資料7	B	
3	教育環境の改善と学生支援体制の強化	1 学生に寄り添った相談体制の強化	1 農業大学校に入学してくる学生について、非農家出身や農業系の学校以外からの入学生が増加しており、多様化が進んできている。それにとともに、個々の学生に対するきめ細かい対応が必要となる。	1 ・カウンセリングの動機づけ 1回 ・教育相談専門員との面談 全学生2回以上	1 多様化している個々の学生に対して寄り添った対応を取るために次のことを実施する。 ・教育相談専門員の設置 ・校内でのカウンセリング体制の充実 ・「全職員相談窓口体制」の構築 ・舎監との情報共有の強化 ・学生からの意見、要望をふまえた改善	1 ・教育相談専門員を1名設置（元特別支援学校での生徒指導経験あり）して、学習に関わる助言、相談業務の充実を図った。また、学生と専門員の個別面談を全学生2回以上実施した。随時、希望や必要に応じて面談を放課後などの時間を活用して行った。 ・4月に全学生に対してカウンセリングの動機付けを行い、また、学生の相談内容に応じて1回のカウンセリング時間の調整を行い気持ちの安定につながるように配慮した。 ・学生の状況や生活指導のために寮舎監との意見交換会を1月に1回程度開催し、全コースの担当と舎監と情報共有と指導内容の確認を行った。 ・学生及び実習助手からのアンケート調査を実施するとともに、集約した意見を学生教育等に反映している。	A	1 ・引き続き、多様化している個々の学生に対し個別に寄り添った対応を行っていく。
		2 指導職員の資質向上	2 職員は普及指導員としての資格を有しているが、教育関係等の知識及び技能を十分に習得していない。そのため、多様化する学生に対応するための教育関係の資質向上が求められる。	2 ・教育センター研修の受講回数：延べ受講回数5回	2 教育関係等の資質向上のために、次のことに積極的に取り組む。 ・教育センター研修の受講 ・『エール』鳥取県発達障がい者支援センターによるコンサルテーション実施（特別支援教育の視点にたった学生対応）	2 ・県教育センターの主催する研修講座を積極的に受講し、発達障がいについての理解や教育相談の対応力向上を図った。 ・『エール』のコンサルを2か月に1回のペースで行い、学生に対する対応方法について助言を受けるとともに、その後の対応についても検討を行った。 ・さらに多様化する学生の増加に対応するため、鳥取県子ども発達支援課が主催する「発達障がい者相談支援員等研修会」の受講した。（全5回 延べ13名受講） ・『エール』主催の発達障がい普及啓発研修会を受講した。（5名受講） ＜評価指標達成状況＞ 教育センターの研修受講 4回（延べ11名）	A	2 ・職員の学生対応に関わる資質向上のために、積極的に取り組んでいく。

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策
4	学生の総合的経営能力の向上	1 学生個々の状況に応じた個別指導の充実	【養成課程共通】 1 学生の就農意欲や体力、学力には幅があり、専攻実習での技術習得には個々の能力・スピードに応じたきめ細やかな指導が必要である。 2 挨拶や報告・連絡・相談を徹底するとともに、実習では作業精度だけでなく効率性なども意識することが重要である	1 ・理解度アンケートに応じた個別指導	1 各コース毎に「理解度アンケート」を実施し、農業技術や農作業安全に対する知識の習得状況について学生と職員の共通認識を図る。学生の苦手分野の克服、作業時間を含むコスト意識を醸成するための指標として活用する。 理解度アンケートの実施（7月、11月の2回）とそれを基にした個別指導（随時）	1 ・「理解度アンケート」により学生ごとに知識・技能の理解度、習熟度を判定し、きめ細かく面談、指導を行うことで、技能習熟度が向上した。 ・各コースで理解度アンケート実施(7月、12月ほか)（詳細は各コースごとに記載）	A	
		2 計算能力を含めた基礎学力の向上	2 営農技術のなかには、圃場面積の計算、施肥量の決定や農薬の希釈など、計算能力が求められるが正確に計算できる学生が少ない。	2 ・1年生学力補完補講座（合格水準達成率：100%）	2 1年生の基礎学力（計算、単位など）を把握し、学力補完のための補講を行う。また、1・2年生とも専攻実習で、実践的に肥料・農薬計算を実施する。 ・1年生学力補完講座（25回） ・学力テスト（随時） ・専攻実習時の実戦力評価（随時）	2 ・19名の学生に対し学力補完講座を21回実施した。 ＜評価指標達成状況＞ 合格水準達成率 4/15：0%→最終：100% ・各コースの農場実習(肥料、農薬、種子等散布)により実践力を磨いている。	B	
		3 幅広い農業知識の習得と販売実習による経営感覚の向上	3 多様化する農業形態の中で営農するために、コースの枠を超えて幅広い知識と技術を身につける必要がある。またモノを作るだけでなく、「売る」ことも意識させることで経営感覚を持った農業者を育成する必要がある。	3 ・「校内技術競技」及び「流通販売実習」の効果的な開催	3 「校内技術競技」を行い、各コースから出題される問題（筆記・実物鑑定）を解きその点数を競う。また、修農祭や校外で「流通販売実習」を実施し、商品PR方法などを学ぶ。対面販売を行うことで消費者ニーズを把握するとともに、接客方法を学び、生産販売に活かす。学生主体で企画、準備、運営を行うことで、就農後の店舗販売や自家農場のPR手法を学ぶ。さらに、修農祭来場者にアンケートを実施し、次期開催等に活用する。	3 ・校内技術競技の開催(6/12、11/1) ・1、2年生と一緒に事前勉強するコースも見られ、学習意欲の向上につながっている。	A	
		4 地域で頑張っている卒業生等を訪問して自己の就農意欲を高める	4 非農家出身の学生割合が高くなっていることから、地域で頑張っている農業者等を訪問し、就農・農業法人就職等に向けた意識付けが必要である。	4 ・各コースの現地視察回数（2回以上）	4 農家・卒業生等の訪問・視察（各コース2回以上）	4 農家・卒業生、農業関係機関等の訪問・視察合計22回：果樹4回、野菜5回、花き3回、作物3回、畜産7回 ・学生が具体的な進路や就農のイメージを持つことができるようになった。	A	
		5 GAPに関する講義の継続及びR6認証の取得	5 近年、農業のグローバル化や食の安全意識が高まっており、生産工程を管理する手法（GAP）の教育が必要となっている。	5 ・GAP認証の継続取得（水稻）、新規認証（肉用牛、乳用牛、生乳）	5 ・グローバルGAPに特化した講義について1年生を対象に年8回実施 ・各コースで改善取組を行う。 ・成果目標として、「水稻」でのグローバルGAPの認証取得（継続）と「肉用牛、乳用牛、生乳」でのJGAPの認証取得（新規）とする。	5 ・GAP普及推進機構から専門家を招き、グローバルGAPの理念から具体的なリスク評価、手順書の作成方法等に至るまで講義・演習・ワークショップを実施した。また、外部講師を招き、整理整頓の仕方や体のメンテナンス方法なども学んだ（5/27～12/12、8回） ・講義を通じ、リスクへの気づき、整理整頓や表示の大切さなどへの意識が高まった。 ・全コースで整理整頓や掲示（見える化）に取り組んだ。（詳細は各コースに掲載） ・学生を中心にグローバルGAPの認証審査を受け、作物コースは「水稻」で認証取得した（11月21日付）。 ・また、果樹コース「日本梨」、野菜コース「白ねぎ」、花きコース「花壇苗」では専門家による内部審査を行い、認証に準ずる取組を継続した。 ・畜産コースではJGAPの認証審査を受け、「肉用牛、乳用牛、生乳」で認証取得した（10月18日付）。	A	

資料8

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策
5	学生の専攻 営農技術の向上	【果樹】 1 ほ場管理に係る主体性、責任感の醸成	1 永年作物である果樹の栽培技術を2年間の限られた期間で習得する事は困難である。よって、技術習得を図るためには、学生が主体的に責任感を持ってほ場管理を行わせる必要がある。 農業技術検定2級、3級の取得を目指して、過去問に取り組み、1年生5名が受験した。 プロジェクトとしてアシストスーツをメーカーから借りて軽労化、省力化について進めている。	1 「1,2年共通」 理解度アンケートでほ場作物の管理等に関する項目について、職員評価で「できる」以上が80%以上 「2年次」 ・作業説明の評価として学習フィードバックの活用	1 「1,2年共通」 ・1人に1樹「1人1樹」二十世紀の担当樹を割り当て、2年間を通して栽培管理を行わせる。 ・梨等の栽培管理に関する基礎知識習得のためのゼミや小テストを月1回実施 「1年次」 ・チャレンジプロジェクトとして数人で簡単な課題解決に取り組ませる。調査をみんなで行いながら理解を深める 「2年次」 ・各学生の担当樹種を決定する。各樹種の管理作業を行う際は目的、方法等を担当の学生が他の学生に説明する。 ・各樹種の生育の節目となる日の記録と毎月1回の定点観察により観察力を養う。 ・プロジェクト学習の課題設定、進行管理等を徹底させる。	1 「共通」 ・学生が担当樹について年間作業を行い樹の状態を見る力をつけた。 ・学生が担当樹の側枝1本を選びコース内で果実のコンクールを行い、果実品質と着果部位の関係を実感させることにより樹の生理と果実の関係について理解が深まった。 ・「因伯之果樹」の読み合わせや、技術検定の小テストを行い基礎学力をつけた。 ・技術検定の勉強会を実施した。 「1年次」 ・交配、摘果、袋かけ、収穫、調整、出荷、せん定等一連の作業を通じて栽培技術を身につけた。 ・2年生のプロジェクトの補助を行い、参考にして各自が行う2年次でのプロジェクトの内容を決めた。 「2年次」 ・作業前に担当樹種について目的、内容を学生、研修生に説明した。 ・プロジェクトの計画、研究を進め、取りまとめることができた。 ＜参考＞ ・農業技術検定の合格率 2級は1年生3／6名、2年生1／2名 1級は1名が合格した。 【理解度アンケート】 1年生 30%→70% 2年生 60→90%	A	1 ・引き続き、プロジェクト活動やゼミ、小テスト等を行いながら、学生の果樹栽培技術を目指していくとともに、わかりやすい目標の1つとして農業技術検定の2級以上を取得できるように指導していく。
		2 新技術、新品種に係る技術習得	2 本校では、新技術、新品種を積極的に導入し、生産体制が整いつつある。これらを活用して生産現場の現状や将来的ニーズに応じた知識・技術の習得を図る。	2 ・学習した新技術について理解度を確認するテストを行い全員が70点以上	2 ・新品種研修会、ジョイント仕立て研修会、現地視察等の参加（3回程度／年）。 ・参加した研修会で学んだ技術を本校の新品種、ジョイント栽培樹等で実際に行い、知識、技術の深化を図る。	2 ・園芸試験場のふれあいセミナーに参加し講演と圃場視察によりジョイント仕立てについて学んだ(10/30)。 ・梨づくり大会に参加した(11/12)。 ・二十世紀梨記念館に赴いて、果樹栽培の歴史などを学んだ(12/1)。 ・南部町、農業法人に視察しジョイント栽培について視察を行った(12/17)。	A	2 ・選果場の見学、先進農家の視察、各研修会等に参加する。
		3 GLOBALG.A.P.の取り組み	3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。	3 ・リスク改善による適合基準達成割合：100% （模擬審査合格）	3 ・生産工程におけるリスク点検、評価及び改善策について前年の取り組みの改善を図るとともに、新たに追加する事項の有無について学生を主体にしながら検討する。 ・学生に主体性を持って関わらせるため、GAP責任者を設けて活動を行う。 ・日本梨ほ場で取り組んできた内容を全圃場に展開する。	3 ・書類の読み合わせや改善活動を話し合い、必要ない掲示等を見直した（2回実施）。	B	3 ・学生が主体となってリスク点検の見直しを行うようにする

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策
		【野菜】 1 栽培基礎技術の向上とプロジェクト学習による実践力の養成	1 コースの学生のうち、農業高校以外の出身者が半数近くを占め、非農家の学生が大半であるため、農業に関する基礎知識及び基礎技術の習得支援が必要である。	1 - 理解度アンケートで、野菜に関する栽培基礎技術に関する項目について「できている」以上の評点が80%以上とする。 - 農業技術検定 1年次：3級100% 2年次：2級 50%	1 「1年次」 - 鳥取県の主要品目である白ネギ、スイカは春～夏に全員で管理を行う。 - 各自の希望と習熟のバランスを考慮して、春作はグループで、夏作は一人で品目を担当、年間一人4品目の程度の栽培担当を経験する。2年次のプロジェクトに向けて簡単な試験を実施、調査とまとめの方法を身に付ける。 - 施肥、農薬の計算、一般的な野菜栽培の基礎知識、主要品目の栽培方法の習得のためゼミを実施、小テストなどを活用しながら早期理解を促す。 「2年次」 - 各自の進路事情合わせたプロジェクト課題に対応した品目を担当させる。 - プロジェクト課題はほ場の準備から収穫終了までの長期的な管理計画を立て、ほ場準備から収穫までの栽培管理及びとりまとめを行う。 1年生に適切な指示ができるように、2年生は1年生のハウス管理の補佐を行う。 ※栽培品目や工程が多いことから、栽培技術の重点項目について、進捗状況を点検しながら、指導を進めることとする。	1 「1年次」 - 春作は白ネギを1年生全員で栽培管理に関わった。スイカは抑制作で接木や整枝の講習を行った。 - 春作は2人以上で1品目の栽培を行い、簡単な試験の調査・とりまとめのやり方を練習した。 - 夏作は1人で2品目を担当。責任を持って管理を行った。 - ゼミや小テストを実施、秋には技術検定に向けて毎日実施。基礎知識や基本的な栽培知識を身に着けることができた。 【理解度アンケート】7月 50.7% →1月 62.2% 「2年次」 - プロジェクト課題について、計画から圃場管理、収穫終了まで自ら行い、結果をまとめて発表する事ができた。校内発表会で金賞、銀賞を受賞、中四国大会に出場した。 - プロジェクトの立案にあたっては、現地の普及所や生産部、学生の実家から協力を頂きながら実施。一部では成果を、生産部の総会で報告した（トマト生産部）。生産現場との接点を持ち、現地の課題に根ざした活動ができた。 ・【理解度アンケート】7月 73.4% →1月 86.0% ・【農業技術検定合格率】1年：3級 100% 2年：2級 16%	B	1 栽培品目が多く、全員が同じ経験を積む事が難しい。担当品目について他学生に説明する機会を持ち、幅広い知識を付ける。
		2 県内先進農家、先進地及び試験場視察	2 野菜コースでは、現地の新技術（管理、品種等）を積極的に導入している、また、産地課題の解決プロジェクトに取り組む学生もいるため、現地の栽培管理状況を理解する必要がある。 さらに、現地ではスマート農業の導入が進むことが考えられ、新技術と併せてスマート農業先進農家の状況も理解する必要がある。	2 理解度アンケートで、鳥取県主要品目の現地状況について「理解できる」以上の評点が80%以上。	2 - 鳥取県主要品目を中心に先進地視察を2回以上実施する。 - 想定する品目(白ネギ、ブロッコリー、スイカ、トマト、ミニトマト、ハウレンソウ、イチゴ等) - スマート農業に適應できる人材育成のため、環境モニタリングや、自動制御、スマート農機等、スマート農業に関する視察を行う。 - 非農家出身者や普通科出身者が、農家の実際を経験し就農意識を高めるため、1年次から産地体験会への参加や農家体験を実施する。	2 - イチゴ、ミニトマト、ブロッコリー、有機農業、6次産業、少量多品目、在阪小売店、の視察を実施。また、園芸試験場本場を視察し、現地課題を学習することで1年生にPJ計画作成を意識させた。 - 県外の先進的環境制御の導入法人を視察し、スマート農業のイメージを持つことができた。 1年生が、2年生のインターンシップ先を視察。また、全員が産地体験会や、農家での短期インターンシップを実施。就職や就農をイメージする事ができた。 【理解度アンケート】7月 48.8% →1月 72.5% 資料 9	B	2 1年次の農家体験について1日ずつ実施したが、作業に慣れるまでに終えてしまうため、農家の実態が見えにくい。複数日の実施をする他、学生によっては農家アルバイトも勧める。

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策
		3 GAPの取組	3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。 令和2・3年度に白ネギでグローバルGAPの認証を取得した。	3 ・リスク改善による適合基準達成割合：100% ・理解度アンケートでGAPに関する項目について「理解できる」以上の評点が80%以上	3 ・生産工程におけるリスク点検、評価及び改善策の検討について、学生主体の取組とするため、学生内でグループを作り、役割分担をしながら改善活動を実施する。 ・野菜の品目を限定せず、圃場、関連施設でGAPの取組を継続する。 ・栽培管理システムを導入、出荷調製の記録や在庫管理をPC管理でシステム化し、効率化とリスク管理強化を図り、専攻運営の効率化も狙う。 ・他科と共通する部分については連携して教育訓練を実施、全体として負担軽減を図る。	3 ・毎週、GAPの改善活動に取り組む時間を確保、手順書の見直しや整理整頓、危険個所の改善を行い、GAPに対する理解が深まった。 ・圃場管理システムを導入。本年度は農薬散布に関するミスを予防するため、登録のチェックにも活用。ミスの防止や、チェックの省力化ができた。 【理解度アンケート】7月 52.2% → 1月 95.0%	A	3 ・取得から年数が経過すると、取組が継承されにくい上、指導側のノウハウも不足するため、他コースや他校の取組を参考にしながら実施する。
		【花き】 1 栽培基礎技術の向上と需要期を意識した栽培管理の習得	1 (1) 近年、非農家出身者が多いため、農業の基礎知識等を習得させることが重要となっている。その上で、花き栽培基礎技術の習得を目指し、さらには、新技術や本県に適する新品目について、積極的に学び、検討することにより、栽培技術の向上を図る必要がある。 (2) 鳥取県では花き振興などのために、毎年「花のまつり（鳥取県花き振興協議会主催の品評会）」が開催され、県内の生産者が技術研鑽を図っている。	1 (1) ・理解度アンケートで花きの栽培基礎技術に関する項目で「できている」以上の評価が80%以上。 ・農業技術検定 1年次：3級100% 2年次：2級 50% (2) ・理解度アンケートで花のまつりに関する項目で、意識の向上が「できている」以上の評価が80%以上。	1 (1) ①農業一般の基礎知識等支援 ・農業一般の基礎知識等を習得させるために、ゼミや小テストを月1回実施。 ②花き栽培技術等支援 ア 生産面 ・担当品目を決め、作業計画・栽培管理を行わせて基礎技術の習得、責任感の醸成を図る。 ・また、需要期（お盆、彼岸、年末等）に出荷する開花調節を実践させて、最新技術を学ぶ。 ・毎週1回全員でコース内圃場を巡回し、生育状況の紹介や質疑応答を行う。 ・同時に作業記録簿の確認や、プロジェクトの進行管理を徹底する。 イ 販売面 ・手に取ってもらえる商品作成を目指し、直売所や小売りを視察して、花束作成や色の合わせ方・POP作りを身につける。 (2) 花き品評会 ・「花のまつり」（鳥取県花き品評会）に出品して生産者の出品物と比較し、栽培・出荷技術の研鑽を図る。 ・花き品評会への出品参加（学生1人当たり1点以上） ・現地視察研修 2回 等	1 (1) ①農業一般の基礎知識等支援 月1回程度ゼミや小テストを行って個々に合わせた指導に努めた結果、学習意欲・知識が徐々に高まった（1年生は農業技術検定3級に全員合格、2年生は50%）。 ②花き栽培技術等支援 ア 生産面 ・概ね毎週コース内圃場を巡回し、生育状況を確認させることでステージごとの生育を知ることができた。 ・7月～9月の出荷を経験することで需要期出荷の重要性が理解できた。 ・トルコギキョウ、シンテッポウユリで開花調節技術を取り入れ、効果を検証した。また、1年生に生育調査を行わせ、計測の仕方やデータ集計について学習させた。 イ 販売面 ・日々の出荷や販売実習等で、POPや陳列方法・配色を工夫して、購買意欲を高める商品づくりを意識付けた。 (2) 花き品評会 ・出荷技術研鑽として1人2点以上出品させた結果、審査員優秀賞を受賞した。 ・展示会場では、農大出品物と受賞品を比較して、栽培・出荷技術の重要性を理解させた。 ・理解度アンケート（9月→1月）31%→71% 資料 10	A	1 (1) ・学生の理解度に応じた指導を継続する。
		2 「花育」を通じた知識・プレゼン能力等の向上	2 地域の幼児や児童に、寄せ植えをとおして花を知ってもらう「花育」活動を実施している。	2 ・理解度アンケートで「花育」に関する項目で「できている」以上の評価が80%以上。	2 ・「花育」活動を通じて学生自身も花に対する知識等を深め、プレゼン能力の向上を図る。 ・「花育」活動 1回 等	2 ・「花育」活動（保育園での寄せ植え体験）を2回開催した（11/27、1/31）。 ・体験当日は学生が説明し、園児と直接触れ合って寄せ植え体験を実施した。 ・理解度アンケート（9月→1月）44%→62% 資料 11	C	2 ・花壇苗についての理解自体はできているが、受講者（園児）との対応に少し戸惑っていた学生が見られた。次年度は対象に合わせた説明の仕方を工夫し、リハーサルを行う等事前準備を行う。

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策
		3 GAPの取り組み	3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。 令和5年度にパンジーでグローバルGAPの認証を取得した。	3 ・リスク改善による適合基準達成割合：100%（花壇苗） ・理解度アンケートでGAPに関する項目について「理解できている」以上の評価が80%以上	3 ・生産工程におけるリスク点検・評価・改善策を、学生主体で取り組む。 ・担当者を決め役割を分担して、週間目標を掲げながら遂行する。	3 ・生産圃場や資材庫等を点検し、学生にリスクの抽出を行わせた。自ら気づくことで改善に向けた意識が高まった。 ・管理日誌や出荷簿を毎日記帳させたところ、観察による気づきや提案が少しずつ行えるようになった。	A	3 ・日誌の記帳や安全衛生管理を続けて、意識の継続を図る。 ・施設の多くを共有する野菜コース等と連携して、教育訓練を実施する。
		【作物】 1 作物栽培（水稻、大豆）の基礎技術の習得	1 水稻の基礎栽培技術を圃場管理を通じて習得する。	1 ・理解度アンケートで水稻の栽培に関する評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。	1 各学生が圃場1筆を責任をもって管理することにより、水稻の技術の習得を図る。 水稻栽培では、2年生のプロジェクト学習等により、星空舞等の食味向上やアイガモロボットを活用した有機栽培の実証、GPSを活用した地力マップに基づく水稻の元肥可変施肥など、現地で必要とされている新技術について検討する。 大豆栽培では、転作の基幹作物の基礎技術を習得していく。 スマート農業等新技術に関しては、プロジェクト学習や先進農家視察、高大連携等通じて技術知識を習得を図る。	1 （専攻1年生） ・ほ場管理について全員が、それぞれ任せられた水田1筆を最後まで管理することができた。 ・簡単な試験課題に取り組むことで、2年次のプロジェクト課題にむけた調査手法を身に着けることができた。 【理解度アンケート】1月時点 77% （専攻2年生） ・全員がプロジェクト課題に取り組み、課題設計から試験および調査まで自ら実施して結果を取りまとめることができた。 ・プロジェクト活動を通じて水稻栽培の知識が深まった。 【理解度アンケート】1月時点 62% （スマート農業技術） ・倉吉農高と連携しドローンによる施肥の研修会参加や本校が会場となった画像診断サービス研修会の案内をおこなった。2年生のプロジェクト活動を通じて、地力マップに基づく元肥可変施肥、収量コンバインによる収穫を通じて、水稻栽培におけるスマート農業技術の見識を深めた。	B	1 ・資料や暦を参考にし、実習の機会を活用した技術や生理生態などの講義を積極的に取り入れる。
		2 農業機械操作技術の習得	2 水田作では主要作業をトラクター、田植機、コンバイン等の農業機械を活用しているが、入学当初の学生は、機械操作の経験がない。	2 ・理解度アンケートでトラクター、田植機、コンバインの操作に関する各評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。	2 学生の機械操作技術の習得を図るため、農大の管理ほ場面積を維持するほか、近隣農家から機械作業実習ほ場の提供を受けるなどにより水田の作業量を確保する。	2 農大実習田等において作業機械の技術研鑽を図り、基本的な機械操作や調整、メンテナンスについて技術習得が進んだ。 【機械操作、機械の調整、メンテナンスの理解度】1月時点 1年生：52%、2年生：74%	B	2 ・実習のなかで機械操作および整備にあてる機会や時間を増やす ・農業機械担当職員と一緒に点検修理を行ったり、メーカーの修理依頼による具体的な事案対応の機会を活用し関心を高める。
		3 有機栽培技術に関する基礎知識の習得	3 有機栽培に興味を持って入学する学生はあるが、具体的な栽培管理は未経験である。	3 ・理解度アンケートでの有機栽培技術に関する項目で「できる」以上の評価が80%以上。	3 有機栽培、無農薬栽培のほ場を設置し、プロジェクト課題等を通じて栽培技術の習得及びメリット、デメリットの理解を図る。	3 ・実習水田における専攻2年生のプロジェクト活動、1年生の担当管理ほ場を通じて全員が有機的な栽培管理を学ぶ機会を設けた。 ・学生により関心に差がある。 【有機栽培の理解度】 1年生：33%、2年生：60%	B	3 ・研修会への参加や先進農家への視察を通じて、有機栽培に係る理解を深める

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策
		4 白ネギ、ブロッコリー等転作野菜栽培のに関する基礎知識の習得	4 農業法人へ就農する学生も複数あり、水田農業の複合経営で一般的に取り入れられている白ネギやブロッコリー等露地野菜の栽培管理について基礎知識が必要である。	4 ・理解度アンケートでの白ネギ、ブロッコリーの栽培に関する評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。	4 白ネギ、ブロッコリー等露地野菜を栽培することにより、栽培の基礎知識を習得する。	4 (白ネギ) 実習を通して基礎的な栽培技術の習得を図った。病害虫防除や雑草対策については理解がやや低かった。 【白ネギ栽培の理解度】1月時点 1年生:63%、2年生：71% (ブロッコリー) 1年次に集中して実習をおこない栽培技術の習得を図った。病害虫防除や雑草対策への理解がやや低かった。 【ブロッコリー栽培の理解度】1月時点 1年生：68%、2年生：67% 資料12	B	4 ・実習や座学を通じて、白ネギやブロッコリー栽培の基礎知識を学ぶ
		5 GAPの取り組み	5 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得により、国際水準の工程管理を理解した学生の育成を図る必要がある。 令和5年度に水稲（収穫まで）でグローバルGAPの認証を取得した。	5 ・R6（2年目）のグローバルGAP認証（水稲 収穫まで）	5 リスク点検、評価及び改善策の検討などについて、コース内で役割分担し、全員で連携して改善活動に取り組む。 水稲ほ場及び関連施設でグローバルGAPの認証に向けた活動を行う。	5 ・GAP普及推進機構の専門家を招いた座学により、GAPの基本理念やリスクの洗い出し、評価方法について学んだ。 ・コース関連施設それぞれに管理担当を2名ずつ決め、月に1回程度、GAPの取組み活動としてそれぞれが担当する施設内の整理整頓に取り組んだ。 ・日々の作業や使用資材の管理、記録をつけることに取り組んだ。 ・10月のグローバルGAP認証継続審査に向け、各自が分担し準備や審査内容の確認や質疑対応の練習をおこなった。 ・11月、水稲部門でグローバルGAPの継続認証された。	B	5 ・手順書の点検や更新、さらに必要な手順書の作成に取り組む。 ・定期的に記録の点検の取り組む。 ・教育訓練を計画的に実施する。
		【畜産】 1 家畜（牛）の飼養管理、繁殖生理に関する基本的知識及び技術の習得	1 近年、畜産コースの学生の多くが非農家出身であり、また農業高校以外の出身者の割合も増える傾向が見られるため、まずは牛に慣れ、基礎的な知識・技能を重点的に習得させることに力を入れる。	1 ・理解度アンケートにより、牛の発情行動、健康状態チェックについて80%以上の理解度評価を目指す。	1 牛の行動や採食量等をしっかり観察させ、健康と異常をチェックできる目を養う。また、発情の発見率の向上など、生産性を上げながら健康に管理する方法を習得する。 基礎知識を習得する目的で「畜産ゼミ」の充実を図る。また、繁殖生理を理解する目的で、子宮の解剖や超音波画像診断器による卵巣チェック等を行う。	1 ・専攻実習時に牛の飼料給与、発情兆候や健康状態の重要管理点について繰り返し指導を行い、観察報告、記録を学生が実施することにより、現場の農場で必要とされる技術習得が進んでいる。 ・牛の妊娠鑑定、発情チェックに超音波画像診断装置を使用し、視覚的に確認することで牛の繁殖生理の理解力が向上し、人工授精師資格取得が進んでいる。	B	1 ・学生自身で考える力を育て、取得した知識、技能を応用し、現場の農場で実践できるよう指導を強化する。

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策
		2 家畜管理用機械等の操作技術の習得	2 畜産関連業種又は農業法人が本学畜産コース学生に求める人材とは、家畜の基本的管理技術及び畜産管理用機械、飼料用作物関係機械の操作技術を習得した人材である。	2 - 理解度アンケートにより、コンブリートミキサー、ホイルローダー、搾乳機械の操作が日常的にできることやロールラッピングマシーン等の操作が1人でできることの評価。 - 大型特殊やけん引以外の免許（小型車両系建設機械、フォークリフト等）について、将来的に必要な者の取得割合100%を目指す。	2 - 飼料の調製と給与、糞や敷料の搬出・運搬、堆肥化、搾乳作業など日々の飼養管理により機械操作の習熟を図る。 - また、飼料用作物関係機械（堆肥及び肥料散布～収穫、調製作業）については体験実習を実施する。 - 就農・就職先での作業に対応できるよう、必要な免許を取得することを奨励する。 1年次から「小型車両系建設機械運転業務特別教育」を受講させる。	2 - 飼料作物（イタリアンソラグラス、飼料用トウモロコシ）の収穫や調製作業、日常の牛舎管理（糞尿処理、飼料調製、搾乳）作業用機械（トラクター、ホイルローダーなど）の安全で基本的な操作を繰り返し実践し、技術向上が図られている。 - 学生全員（10名）が小型車両系建設機械運転業務特別教育修了者である。フォークリフト運転技能講習修了者は4名。	B	2 農業機械の安全な基本操作の徹底やメンテナンスの基礎の習得に努める。
		3 牛の繁養、誘導技術の習得	3 乳牛及び和牛共進会に積極的に参加を行い、牛の誘導技術の習得を行っている。	3 各共進会への出品 - 和牛（中部畜産共進会、鳥取県畜産共進会） - 乳牛（鳥取県畜産共進会、B&Wショウ）	3 共進会に参加をすることで飼養管理技術の習熟と育種改良の面の充実を図る。	3 - 和牛について中部畜産共進会に雌牛1頭を調教して出品し、農家や審査員から牛の体型審査のポイント、目標を学んだが、優等賞には選ばれず県共進会出品はできなかった。 - 乳牛では、鳥取県畜産共進会に雌牛2頭を調教、出品し、直接酪農家から調教方法などの指導を受け、2頭とも優等賞に入賞した。	B	3 2年後の北海道和牛全共への出品の取組がR7年春から始まるため、調教技術向上のために研修会への参加等を増やしていく。
		4 GAPの取り組み	4 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。生産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得を通して、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。	4 JGAP畜産の認証取得	4 - 管理規程書の作成 - 各種作業マニュアルの作成（搾乳機器、各種畜産機械操作マニュアル等） - 現場での記録表とチェック表の適正な運用	4 - 大山乳業による「白バラ認証」の継続取得に取り組み、生乳生産管理に係る基準を学び、生産現場環境の改善を行い、春と秋の2回の審査を受け、認証された。 - 外部コンサルの指導の下、学生を主体として牛の生産工程全般（和牛、乳牛、生乳、自給飼料）のJGAP認証に向けて取り組みを行い、10月に鳥取県初のJGAP畜産の認証を取得した。	A	4 白バラ認証の継続認証とJGAP畜産のシステムを上手に運用し、より良い農場となるよう取組を継続していく。
6	学生の農業機械操作技術の向上	1 大型特殊免許とけん引免許の取得	1 就農や農業法人へ就職を目指す学生にとっては、トラクター、コンバイン等の大型農業機械の運転操作が必須条件であり、大型特殊免許の取得が必要。また水稻・畜産関係へ就農や農業法人へ就職を希望する学生は、けん引免許の取得も必要となっている。	1 1年生の大型特殊免許の合格率(100%) 1年生のけん引免許の合格率(90%)	1 - 試験日までの練習期間が限られているため、練習日を計画的に設定する。（練習は、効率よく交代を行い1人当たりの練習回数を十分確保する） ①大型特殊免許 6人/日、練習回数4回～5回/人 乗車回数12回～15回/人 ②けん引免許 5人/日、練習回数6～7回/人 乗車回数18～21回/人	1 1年生の大型特殊免許の合格率 100% 18名中18名合格 1年生のけん引免許の合格率 100% 17名中17名合格（希望者）	A	1 これまでと同様に学生個々の能力に合わせたきめの細かい免許取得実習を実施するように計画したい。

資料13

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策
		2 農業機械の操作技術の向上	2 卒業後に就農又は農業法人へ就職する学生は、刈払機やロータリー耕耘の運転操作は必須であるが、安全性の確保や操作の苦手な学生も見受けられるため、当該学生のレベルアップが必要。	2 ・確認試験の合格点 達成率 草刈り (80%)、耕耘 (80%)	2 農業機械の取り扱いに不慣れな学生に農業現場で使用頻度の高い、刈払機及びロータリー耕耘について補完的に追加実習を行う。 （指導対象学生は各コース担任と相談の上決定） ○刈払機（10名程度） ・重点指導期間(7月～11月)、実習(草刈り) 5回/人 確認試験(実技)、習熟度アンケート ○ロータリー（8名程度） ・重点指導期間(7月～11月)、実習(耕耘) 5回/人 確認試験(実技)、習熟度アンケート	2 ・刈払機については、年度最初の講義の中で4グループに分けて、指導教員による見極め、個別指導により操作技術を習得させ、今後の実習に備えて実践を経験した（100%）。 ・ロータリ（トラクタ、管理機）耕耘については、取扱い説明書を講義の中で説明するとともに、現場で実際に機械を見ながら操作手順を確認した。ただし、耕耘実習については実施できなかった（80%）。	B	2 ・ロータリー（トラクター、管理機）の耕耘実習について全員を対象として実施するように計画したい。
		3 農業機械の点検整備技術の向上	3 使用する機械の操作技術の習得のみならず、その点検整備についても基本知識の習得と技術の向上が必要である。	3 ・確認試験の合格点 達成率 知識 (100%)、実技 (100%)	3 使用機械の構造と点検整備の手法について学ばせる。 ・取扱説明書の重要性・点検整備の重要性を認識させる。 ・機械の取扱説明書の熟読、頻繁な確認による知識の向上を図る。 ・機械の点検整備（日常点検・定期点検）の反復による技術の向上を図る。（実技・確認）	3 ・取扱説明書の重要性・点検整備の必要性については、全員が理解した。 ・点検整備の重要性ついて、主に使用する機械となる刈払い機及びトラクターの取扱説明書を熟読し、整備点検の重要性を説明した。。	A	3 ・個別の機械について、実際に整備点検の実際を体験させる。
		4 農作業安全意識の向上	4 農作業事故を未然に防ぐためには危険箇所、危険行為を事前に予測、把握することが重要であるが、学生にはその意識・知識が乏しい。	4 ・農作業安全関連授業の実施（2回）	4 農作業安全の授業を設定する。また、学生の事故防止につながる具体的事例を参考にしながら指導する。 ・農作業安全関連授業の実施（2回/6回） ・校内危険箇所、行為を把握し、農作業事故の減少に繋げる。 ・職員向けの「農業機械の整備、安全使用等」に関する教育訓練を実施し、学生を指導する。	4 ・農作業安全講習を講義の中で2回実施 ・実際の事故事例について、具体的な内容をあげて授業の中で検証し、日頃から危険な運転にならないように共通認識ができた。 ・職員向けの教育訓練を実施しており、「農業機械の安全使用」を学ぶとともに最新の農業機械についての知識や技能を身に付けた。	A	4 ・農業機械に限らず、農作業事故防止への意識を機会あるごとに啓発する。
7	社会情勢に即応した実践教育の実施	1 実用性の高いプロジェクト活動の確保	1 農業現場での実用技術の習得並びに課題解決手法を習得する目的でプロジェクト活動（卒論）を実施している。 例年、プロジェクト成果数課題を農村青年冬のつどいや直播栽培研究会等で発表している。		1 課題解決手法の習得を意識するとともに、生産現場のニーズに応えられ、学生が就農後に活用できるプロジェクトの完成を支援する。	1 プロジェクト研究の指導を行い、20名全員が研究内容を取りまとめて発表した。その中で本校代表として2名（野菜コース、果樹コース）が中国四国ブロック農業大学校等プロジェクト発表会に参加し、発表を行った。 令和7年1月22日、中部農村青年連合と農大学生の「冬のつどい」を開催し、農業青年の意見発表やプロジェクト発表を聞いた後、農業青年と意見交換を行った。 令和7年2月18日、1年生のプロジェクト計画検討会を行い、次年度の研究について学生や先生が質問やアドバイスをを行った。	A	プロジェクト研究については、産地の農業青年の取組等を参考にしながら、就農後に活用できる様に支援していく。

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策
		2 資格・免許取得	2 卒業後の就農（自営、雇用等）に即応するため、大型特殊・けん引免許の他、様々な資格・免許取得を推奨し、取得支援を行っている。	2 ・大型特殊・けん引免許（農耕車限定）以外の資格・免許取得者割合50% ・日本農業技術検定合格者割合60%	2 資格・免許取得者数、取得資格・免許数を確保するため、資格試験情報をきめ細かく学生に周知・指導する。 フォークリフトは2年生の4月、小型車両系建設機械は1年生の5月、食の6次産業化プロデューサーレベル1は1年生の7月、レベル2は1年生の10月に資格試験に挑戦しやすいようカリキュラム編成に配慮した。	2 - 大特免許・牽引免許（農耕車限定）以外の資格・免許取得のための支援を実施し、以下の資格を取得した。 ・フォークリフト：9名 ・小型車両系建設機械：12名 ・家畜人工授精師：7名（見込み） ・食の6次産業化プロ レベル1：4名 ・食の6次産業化プロ レベル2：1名 ・日本農業技術検定合格：1級 1名 2級 5名、3級 9名（合格者割合43%（合格者15名/受験者35名）） ※今年度は日本農業技術検定境界から合格率が一定以上の上位団体として優秀団体として表彰された	資格・免許取得等 A 技術検定 A	2 ・各コースで資格取得の周知機会を増やす。特に、フォークリフトや小型車両系建設機械など将来使う見込みの高いものについては積極的に促す。
		3 地域社会活動への参加	3 1、2年生ともに履修内容に地域貢献活動（ボランティア）を盛り込み、地域社会の一員としての自覚の醸成を図っている。また、近年、コロナ禍でイベントなどの交流の機会が少なく、コミュニケーションが苦手な学生もあり、コミュニケーション能力の向上が必要。	3 ・地域ボランティアへの参加（1回）	3 地域貢献に対する意識啓発とボランティア活動への積極的参加を促す。また、コミュニケーション能力向上に向けた講座を設ける。	3 ・学生の地域貢献活動を「農村社会と文化」「農村社会とコミュニケーション」の講座の単位の一部として評価。 ・学校からも倉吉市社会福祉協議会などと連携して積極的にボランティアの紹介を行った。 ・学生全員が1回以上のボランティア活動を実施した。 ・ボランティア活動を通じて、地域の人との交流や人の役に立つことの喜びを感じる等の意見があった。	A	
8	多様な研修制度の運用と研修生のニーズに即した就農支援の実施	1 関係機関との連携による進路調整	1 アグリチャレンジ科は、農業に関する基礎訓練として定着し、各機関の就農相談においても、農業未経験者に第一に促す研修として浸透してきた。令和5年度からは大特免許取得の機会を盛り込み研修生の技能アップを図る。 研修生の進路調整を進めていくにあたっては市町村、普及所、JA、担い手育成機構等関係機関との情報共有および意識統一を図っている。	1 ・アグリチャレンジ研修 就農率70%	1 雇用就農意向の研修生の就職に向けて、研修調整員による研修生情報および雇用可能な経営力を有する経営体情報について関係機関と共有することに一層努める。	1 ・アグリチャレンジ科修了生42名のうち27名（64%）が就農した。 - 雇用就農21名、自営就農0名、親元就農4名、研修後就農予定2名 資料 4 資料 14	B	1 ・研修生の進路意向を関係機関と情報共有し、求人情報の少ない地区での雇用先を連携して探すことで、雇用就農率の向上を目指す。

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策
		2 研修の周知	2 スキルアップ研修の研修生は減少傾向にある。一方、アグリチャレンジ研修は、大特免許取得のカリキュラムにより研修生はやや増加傾向である。 本校研修を経て独立自営就農した方、アグリチャレンジ科受講をきっかけに雇用就農に至った方等、近年で様々かつ優良な就農事案が生まれている。	2 ・研修生の確保	2 ・各種機会を活用し関係機関への再周知を図り、就農相談時に適切に提示していただけるようにする。また、JA・市町村・移住部門の協力を仰ぎ、募集時期をとらえた各広報誌への記事掲載やHPでの情報発信を行う。 また、県内外での（雇用）就農相談会、ふるさと鳥取県定住機構のイベント等へ出展し研修制度のPRを行う。	2 ・令和5年度からはアグリチャレンジ科において農業法人等の就職に有利といわれている大型特殊（農耕車限定）の免許を取得できる技能実習を始めたことを、募集チラシ等で情報発信してきており、近年受講希望者が増加してきている。 <入校者数：R4年度→26名、R5年度→36名、R6年度48名（令和7年2月6日現在）> ・県・市町村の広報誌や新聞へのお知らせ掲載、市町村、JA等関係機関と連携した就農相談者への研修紹介を実施した。 ・県内、県外での就農相談会にブース出展し研修制度のPRを行った（県内3回、東京3回、大阪3回） <スキルアップ長期研修受講者> 果樹2名（～10月）、野菜1名（10月～） <スキルアップ短期研修受講者> 野菜0名	B	2 ・就農相談会等を通じて、相談者への研修紹介を根気強く継続する。 ・研修生募集チラシを関係機関に幅広く配布、またHPでも広報し、連携しての周知を継続する。 ・また、県、市町村、JA等の広報誌や新聞へのお知らせ掲載を活用し、研修生募集について広く情報発信していく。 ・就農事例の記事作成を継続し、掲載数増に取り組む。
		3（GAP関連） 研修拠点施設の適正管理	3 スキルアップ研修野菜専攻の拠点施設である農業学習館は、栽培管理に係る資材・小農具・出荷資材・各種工具などを保管するとともに、毎日出荷調製作業を行う場所として日々の整理整頓の徹底・リスク管理等について、自営開始を志す研修生に意識付けのために活用している	3 ・出荷調整作業におけるリスク点検及び改善箇所の検討	3 農業学習館内は自営就農する研修生に合わせて、出荷調整作業におけるリスク点検及び作業性を考慮した物品の配置等の変更、改善を実施し、研修終了後スムーズに作業実践できるようにする。	3 ・出荷調整時の異物混入等のリスクを研修生と再点検し、道具類の整理整頓を心掛けた。 ・また、白ねぎ出荷調製作業の作業効率性を考慮した作業場レイアウトや作業手順の改善を検討し、最善方法を就農時に実践できるように研修生と取り組み、研修当初よりも作業効率の向上が図れてきている。	B	出荷調製作業を中心に、研修生と一緒に「カイゼン」取り組みを継続する。また、GAPの取り組みについても、整理整頓の徹底を図り、実践を継続する。